

宿命論の悲劇

「ダントンの死」覺書

上原欣一

シュウヒナー (Georg Büchner. 1813—1837) は一八三三年一月許嫁のミンナ・イエグレに宛てて書いている。……僕は革命の歴史を研究してみました。そして歴史の恐るべき Fatalismus に打ち挫かれたような氣持です。僕は、人間の性質には或る驚くべき同一性が、そして人間同志の間の諸々の關係には、凡ゆる人に与えられていて、また何人にも与えられていない一つの避くべからざる暴力があるのを見出します。個人はいわば波の上の泡にすぎず、人間の偉大といつても單なる偶然で、天才の支配は人形芝居であり、鉄の法則に対する嗤うべき蛆の踊りにすぎません。この法則を認識するだけがせいぜいで、これを支配することなど不可能です。今更僕には歴史のこけ嚇しや木偶の坊共の前に身を屈めようなどという氣は起りません。

当時、風光豊かなヴォーゲゼンの山々に囲まれ、フランス政府治下の比較的自由に鬱鬱な氣分に包まれたシュトラスブルクから移つて、「一刻も興味を惹くことのない」故郷のダルムシュタットに、更には「凡てが空ろで陳腐な」田舎町ギーゼンの大学に身を落ちつけ、父親の希望する——自分も滿更嫌いでもない医学の道に精進を余儀なくされて

いたビュウヒナーは研究の傍ら、心を許せる友の少いままに、専らデカルトからスピノザに至る哲学や、歴史殊にフランス大革命の歴史を読む時間が多かつた。フランス革命の話や歴史は少年の頃からビュウヒナーに馴染みの多いものであつた。父のエルンストは軍医としてナポレオン支配下のオランダ軍に従つたりしてフランス革命を身を以て体験してをり、当時フランス軍に占領された地方の大ていのドイツ人が、少くとも古いドイツの封建制からの解放を齎してくれたという点だけでも自由のフランスに対する憧憬をナポレオンという人間に結びつけて考えたと同じようにエルンストもナポレオンに、ひいてはフランス革命そのものに対する関心は浅くなく、一八二六年から三〇年にかけて刊行された Karl Strahlheim 著『現代』という雑誌風のフランス革命実録を愛読し、ビュウヒナーの弟ウィルヘルムの伝える所では、家庭団欒の夕方にはよく子供達を前に朗読して聞かせ、子供達もそれには活潑な関心を示した。就中兄のゲオルク、ダルムシュタットのギムナジウム以来「自殺論」を契機に人間の自由意志と決定論の問題、既存の社会秩序に対する人間の作用力の可能性の問題などに専念することの多かつたゲオルク・ビュウヒナーはこのレクチュアから深い影響を受け、「ダントンの死」成立の功を負うている。

しかしビュウヒナーがこのフランス革命の歴史とシユトラスブルクでの同じ学生達との交友、更に前三月初期の反動と進歩、自由と封建的桎梏との相錯綜せる社会相に対する直接の見聞から学んだものは、革命内至政治制度の変革に対する肯定的内至は樂觀的見解には発展しなかつた。上述の手紙にあらわされた考えはそのまゝ、ほゞその十五ヶ月後に書かれたフランス革命を背景とするダントンの劇の根本内容を成すものである。一篇の主人公はダントンであるけれども、それはもはや昔日の最も過激な革命家ダントンではない。劇を、歴史を動かす強力な人間ではない。劇の進行は彼の意志や行動とは何の関わりもなく彼及びその一派の破局へ導いてゆく。ここに歴史の宿命的な必然性をみるのは容易い。しかしダントンの劇におけるビュウヒナーの考えは二つの根本的な問題に集約される筈である。その一

づは人間存在そのものに関わる Fatalismus の問題である。前述の手紙で更に続く言葉がこうである。

……「必ず」という言葉は因業な言葉の一つです、この言葉で以て人間は皆洗礼を受けたようなものです。「躓物つまずきは必ず来らん。されど躓物を来らする者こそ禍害わざはひなれ」という言葉には怖しくなります。僕たち人間の心の中に在つて嘘をついたり、人を殺めたり、盗みをはたいたりするものは一体何でしようか……

このマタイ伝の言葉を引用した箇所はそのまま、夜更けて一人過去の自ら犯した罪障の記憶に脅かされるダントンの口から発せられる。最も容赦のない過激派の一人であり、九月の大虐殺の張本人として、次々と人々をギロチンにおくつた彼は、今更自ら指導した脅怖政治の果しない継続に疲れて、血に飢えた過激派とブルジョワ的保守のジロンド党との間の緊張を緩和し、正常な憲法的秩序への漸進的移行に努力したところで既に遅かつた。「社会革命はまだ了つてはいない。革命を中途半端に終らせる者は自らの墓穴を掘るものだ。上流社会はまだ死んではない。凡ゆる面で甘やかされきつた階級の代りに、健康な民衆の力が現れてこなければならぬ。不道徳は罰せられなくちやならない。そしてその道徳はテロによつて行われなくちやならない」と真正面に反駁するロベスピエールに対して唯物的エビキュリアンのダントンには正当な革命論で応酬する代りに、「堅蔵」のロベスピエールの振り廻す道徳論を傲然と貶しつけることしか出来ない。この劇の幕明きから既にダントンは革命の進行に対して否定的であり、人間存在に対しても一種の不可知論的な懷疑に陥いつている。「俺達はお互にお互い同志余りわかちやいないんだ。俺達はいわば皮の厚い象みたいなもんだ、お互に手をさしだし合つちやいるが、無駄な骨折りというもんだ、お互に粗い身体の皮を擦りあつて話さ——俺達はみんな至つて孤独なんだよ。」人間は互いに相手を知ることが出来ないもんだというダントンの言葉は、相手に裏切られたとか、相手を信ずることができないとかいつた生易しいものではない。生れながらに「必ず」という呪いのかかつた手を誰が呪うことが出来ようか。

俺たちはいわば人形なんだ、えたいの知れぬ強い力の糸にあやつられる人形なんだ。俺たち自身は空だ、無だ！亡霊どもが争いに使う剣だ、道具にすぎない——お伽噺のようにただその手が人に見えないだけだ。

ここで作者と作中の人物とを混同するような愚は犯さないまでも、この劇全体に行き亘るダントンのニヒリステイックな或はシニツクな雰囲気を凝縮して、それに冷静な唯物論者の目と暖い人間的な共感の気持を与えれば、ほぼビュウヒナー像に近い輪廓が出来上る。そしてこの唯物論は宗教の現実的な効用を否定しはしないけれども、スピノザに学んだビュウヒナーは汎神論を越えて「無神論の岩」におつかる。ここはリュクサンブールの監獄。囚人数人が神談義をやつてゐる。

ペイン ……つまり神は存在し得ずということになる……

メルシエ 待ちたまえ、ペイン！だが創造が永遠だとすれば？

ペイン そしたらそれはもう創造じやないよ、そしたらそれはスピノザの言うように神と一つであるか、乃至は神の属性というもんだ。そうしたら神はすべての中の中に在るということになる。つまり君の中にも……僕の中にもいるというわけだ。そうなれば別に悪くはないが、その代りまた、われわれ皆の中にいる主なる神が齒痛をおこしたり、淋病になつたり、生理めになつたり、少くともそんな不愉快な想像を逞しくすることができるという事になれば、神の尊嚴もはちの頭もありやしないということ認めざるを得ないことになるぜ。

フランス革命に一役買った歴史上のトーマス・ペインは事実自ら弁解する通り無神論者ではなかつたかも知れない。しかし作者のビュウヒナーには自分の無神論を述べるにはこの英国人の口を藉りる方が得策だつた筈である。スピノザの汎神論とビュウヒナーの唯物論的宿命論と結ぶときペインの口からは避け難い疑問の聲が迸る、「不完全なものを取り除いてみたらよい、そのときこそはじめて神を立証することが出来るんだ。スピノザは之を試みた。なるほど悪

は否定し得る、しかし苦痛はできない。理性だけが神を証明できても、感情の方でそれに逆らうんだ。いいかね……
なぜ僕は苦しむんか？　こいつが無神論の岩なんだよ。極くかすかな苦痛の痙攣、ちよつと原子が一つ動いても、上から下まで創造にひびが入るんだ。」

『ダントンの死』においてビュウヒナーの心を占めたもう一つ別の問題は、革命の背後にあつて而も革命の原動力をなしている人民大衆の力と限界の問題である。一八三〇年代のヨーロッパは反動勢力の弾圧が加われば加わる程却つていたる所に反封建、反政府の革命気分が、主に自由主義という形で旺盛していた。特に当時ビュウヒナーの学んだシュトラスブルクはナポレオン戦争以来フランス政府の管轄下にあつて、直接にパリの革命家たちの息吹きが通いドイツ、イタリー、ポーランドなどの政治的亡命者達の足溜りともなり、学生運動もドイツ国内に劣らず、「人權協會」という革命的結社のシュトラスブルク支部も主として医学部や神学部の学生達が主体になつていたらしい。この「人權協會」にはビュウヒナーは加盟しないまでも、顔を出してみる程度の交渉はあつたようである。この第一回シュトラスブルク滞在は一八三一年秋から一八三三年夏にかけての主に自然科学、動物学、比較解剖学などの勉学のためであつたが、ただこの頃から彼には、いわゆる革命家気取りの自由主義者達にはあきたりないものがあつたようである。三三年六月ギーセンに移る直前ビュウヒナーは両親宛てて書いている、「僕がギーセンの田舎政治や革命的児戯に捲きこまれたりはほしくないということだけは見通しがつきますよ」と。当時吾子の学生運動を氣遣つていた両親を安堵させようという意図を勘定にいれても、ビュウヒナーにとつて当時の学生運動や自由主義者たちの徒らな大声呼号は、子供の火遊びのように根のない、見通しない浮ついたものと映つたようである。こうした否定的見解に達するには達するだけの根拠が充分に彼にはあつた。今引用した手紙の前文は次の通りである。

僕はなる程今後僕の主義に従つて行動をするつもりではいませうけれども、最近学んだ所では、ただ人民大衆の己

むに己まれぬ欲求だけが何らかの変革を招来することができただけで、個々の人間がいくら狂奔騒号したところで甲斐のない気違い沙汰にすぎないということです。笛吹けど人踊らず、踊れども人囃さずということです……

いくら二、三の者が笛を吹いても、人民大衆の方で踊らない限り、革命という大事業は畢竟挫折の運命を辿り、「ガリヤの雄雞も斃死する」に至るといのがビュウヒナーの渝らない信念になつていた。而もこの民衆はよくよくのことが無い限り動こうとしないものである、経済的な窮迫がそれである。ハイネと違つてヘーゲルを知らなかつた古典的唯物論者のビュウヒナーは未来の弁証法的發展の見通しに於ては些か難はあつたけれども、現状の洞察には透徹せる史眼を有していた。「現代は純粹に物質的です」とか「貧しいものと富める者との間の關係のみが世界における革命の唯一の要素です。飢えのみが自由の女神となることができなのです。もし農民に腹一杯食べさせてごらんさい、革命は卒中を起して下いますよ」とカール・グツコウ宛に書くとき、ビュウヒナーは先の三三年四月のフランクフルト事件のあつけない結果や、自ら過激な革命的バムフレットを草して指導したヘッセンの革命運動の無残な失敗に學んだ経験が大きく基礎になつて信念になつてゐるようではあるが、この農民に代表される人民大衆の「貪欲な」余りにも現実的な感覺に対する認識はこれらの事件以前既にシュトラスブルク在学の頃に得られたものようである。フランクフルト事件直後の四月五日彼は両親に宛てて書いてゐる、「たとひ僕が今度の事件に関与しなかつたとしても、そして今後起る事件にも関与しないとしてもそれはこうした事件を是認することができないからというわけでも、あるいは僕の臆病からでもなくて、現下の状況ではどんな革命運動も僕には無駄な企てだと思われて、現在のドイツ人に、権利のための闘争に立ち上ろうとする人民を見る人達の幻想には一緒に捉われたくないからです……ドイツ人（民）の無關心ときたら本當に凡ゆる計劃をも水泡に帰せしめるほどのものです。」このドイツの民衆、「純粹に物質的」な人民大衆に失望してゐるビュウヒナーが一年後には同じ農民を相手にヘッセン公国の秕政の内情を曝露し、

ブツバッハへの革命的自由主義者ワイディヒと共に同志を語らい、農民蜂起の企てを進めているのである。革命の時期未だ至らずとの見解をとつていたビュウヒナーが逮捕、いや下手すれば生命の危険を侵してまで、なぜにかゝる民衆煽動の挙に出たのか。一人の人間の行動をすべて理性の尺度で測ることは勿論できないけれども、おそらく当時の友人アウグスト・ベッケルが法廷で述べているように、実証主義者のビュウヒナーは「ドイツの人民がどれ位革命に乗気を示すものか」しかと自分の目で確かめてみたかつたのに違いない。

いずれにしても当時のビュウヒナーの権力者、搾取階級に対する憎悪と、貧窮に悩む一般民衆に対する同情の気持には寔に真実なものがあつて、こうした気持は、「愚昧で附和雷同的な民衆」という意識にも拘らず、ダントン劇にも反映しない筈はなかつた。

この民衆の「物質的に惨めな」状態、愚昧な附和雷同性、しかも空疎なまやかしの言葉などには惑わされぬ現実的な論理、従つて一つの大きな社会的変革を根本に於て推進する力となる輿論を最もよくあらわしているのは、おそらくブロンプターのシモンとその女房の登場する「横町」の場であろう。今しも「焼酎に足をとられた」シモンが娘のことで女房と争つてゐる。娘は貧に窮した拳句、母親が「取持人」になつて「軀を張つて」稼ぎ、両親を養つてゐるのである。ヴィルギリウスもどきの声音をまわらぬ舌に操らうとするシモンを女房の雄弁がやりこめる、「……あたし達は皆からだを張つてかせぐんだ、それがなぜそれをしちやいけないんだね。あの娘が生れてきた時だつて、お袋のあたしはやつたもんじやないか。そして苦しい思いをしたもんさ。それがお袋のためにあの子にやれんことがあるもんか、それやあの子もやつぱり苦しい思いをしようけれど……。」そこへ、仲裁に入つた市民の一人が助け舟をだす、「あの子が何をしたつていうんだ？ 何もしやしねえじやねえか！ ひもじけりやこそ淫売もし、乞食もするんだ……忌々しい、ああして俺たちの娘を買う野郎どもめ……。」ここで市民達に呪われるのは單に生き残りの貴族や

国外亡命者ばかりではない、民衆を革命に煽動しておきながら、その甘い汁を一人占めにする革命便乗者や革命成金あるいは掛声ばかりでちつとも結構な約束を果してくれない革命のお偉方なども市民の憤懣の対象になる。

第三の市民 あいつらの血管には、われわれから吸いとつたもの以外は一滴の血もないんだ。あいつらはおれたち
にこういつたもんだ。——貴族のやつらをおち殺せ、奴らこそ狼だ！ そこでおれたちや貴族の奴らを街燈に吊

して曝首にしたんだ。あいつらはまたこういつた。国王の拒否権が諸君のパンを奪つて啜うんだと。そこで俺た
ちはその拒否権を叩きつぶしたんだ。あいつらはまたこういつた。ジロド党が諸君を餓死させるんだと。そこで
俺たちはジロド党をギロチンにかけたんだ。ところがあいつらはその死人の皮まで剥ぎとつているくせに、俺
たちの方は相も変らず、脛を出してかけ歩き、ぶるぶるふるふるえてる仕末だ。あいつらの股の皮をひんむいて、俺
たちのズボンでも作ろうじやないか……さあさ！ 穴のあいてない服を着てる奴なんかぶち殺しちゃまえだ！

第一の市民 読み書きのできる奴はぶち殺しちゃまえ！

第二の市民 国外に逃げてゆく奴はぶち殺しちゃまえ！

一同(叫ぶ) ぶち殺せ！ ぶち殺せ！

そこへ二三人のものが一人の若い男を引きたてて来る。

二三の人身 ハンケチなんかもつてやがる！ 貴族だ！ 街燈に曝首だ！ 街燈に！

第二の市民 おや？ あいつ手鼻をかまねえな？ 街燈行きだ！

若い男 待つてくれ、紳士諸君！

第二の市民 ここにやそんな紳士なんて一人もいやしねえよ！ 街燈行きだ！

すんでのことに「麻紐で首のあたりにいたすらを」されかけたこの若者も、思わす口から出た警句めいた言葉のため

に危うく命を拾つて逃げ去る。とそこへロベスピエールが女房連やサンキュロットの連中と共に現れる。

ロベスピエール どうしたんだ、諸君？

第三の市民 どうなるもんかい？ 八月、九月とわずか二三滴の血ぐらいじやとても国民の頬つべたは赤くなりつこないよ。ギロチンなんか手ぬるすぎるよ。どしゃぶりと来てもらいいたもんだね。

第一の市民 女房子供はパンをくれろとわめいているんだ。貴族の肉でも食わしてやりていところだ。さあ！ 穴のあいてない服なんか着てる奴はぶち殺してしまえ！

一同 ぶち殺せ！ ぶち殺せ！

ロベスピエール 法律の名において！

第一の市民 法律つて何だ？

ロベスピエール 人民の意志だ。

第一の市民 おれたちがその人民だ。だがおれたちはいつそのこと法律なんかいいんだ。即ちこのおれたちの意志が法律なんだ。即ち法律の名においてもはや法律なんかいいんだ。即ちぶち殺せ！

一七八九年七月バステューヌ監獄の破壊に端を発したフランス革命も、四年後の五月三〇、三一兩日のジャコバン派の市参事会及び議会に対する暴動行為をきっかけに、第三の、エロー・セシエルのいわゆる「再編製の段階」に来ていた。六月二日のジロンド党壊滅後はフランス各地に反革命の暴動が起り、ジャコバン派内部にも過激と穏健とが分裂対立し、一般民衆の相も変らぬ困窮をよそに、無秩序と恐怖が支配していた。この頃にはダントンは既に「前進する大衆の中で足ぶみ」をして、革命の「急流のような事実」には逆らわれないまでも結局は革命のこれ以上の進行をよるこばない、いわば革命に対する裏切者になつてゐる。事実革命の主導力はバリのコンミューンを形成する各セク

シヨン、あの愚昧で貧困で弥次馬的な一般大衆の選良ともいへべきサンキュロットをそのメンバーとするセクシヨンに完全に握られていたのであつて、「革命委員会を牛耳るロベスピエール一派は権力の掌握と同時に我れと自らこの権力の重圧に自らを支えることができず、九四年三月一五日にはコンミュニンの一方の旗頭である左翼の急先鋒エペール一派を投獄、次いで同一八日公安委員会の検事ショームットを投獄、同三〇日遂に、外敵を敗つて名声赫々たるダントン及びその一派を逮捕投獄、エペール一派に次いでジェルミナル一六日（四月五日）これを処刑するに至つた。」この四月五日の断頭台上における「ダントンの死」に至る約十日間ばかりが一篇の劇の時間的内容を成しているわけだが、表向きの主人公ダントンは、先にもいつたように、もはや劇の、少くとも革命劇の主役を演じ得るような状態にはない。といつて勿論「共和国の武器はテロであり、共和国の力は道徳である」と大見得を切り長広舌を揮い、而もダントンには、「ただほかの奴らの方が自分より悪人なんだという程度のくだらない快を食らんが為に三十年も同じ聖人面をぶらさげて天地の間を歩きまわつてゐる」と冷笑されるロベスピエールも、作者のビュウヒナーには決して感情的に同情されるような役ではなかつたようである。ダントンもロベスピエールも互いに一方の大立物として争いながら結局はギロチンにかけられる。それが彼等の宿命であり悲劇であつたのだ。テロを徹底的に遂行することも、逆にテロを終熄させることも共に、民衆をその「物質的窮乏」から救い上げることができなかつた。むしろ民衆の圧倒的な声に彼等がひきずられたというのが真相であつた。テルミドールのいわゆる反革命も、この声の背景なしにはおそらく敢て成功しなかつた筈である。ビュウヒナーのダントン劇を民衆劇とよぶのは些か無理であろうけれども、民衆と分離した場合の革命内部の矛盾と悲劇は、作者自身の實際運動の体験と悲劇作家としての秀れた才能と相俟つて、実にリアルな迫真力を以て描写される。

ビュウヒナーにおけるリアリズムについては既に今日では文学史上の定説になつており、『ダントンの死』及び断

片のまま残された『ヴォイツェク』の二つはドイツ近代写実劇の輝かしい先駆をなすものである以上に、後代の自然主義にもビュヒナーに匹敵するリアリズムの傑作を探し出すことは困難である。ビュヒナーには元々作家などにならうとする志望はなかつた、少くとも作家としてパンの資を稼ごうというような意図は更になかつた。文筆活動から「名声を得たい」と思うことはあつても、パンを得ようとは思わない」と常々口にしていた彼は自分の天職、彼がこれだけは自分も物になると信じた自然科学の道に一刻も疑いを抱いたことはなかつた。それだけに彼は、ロマン主義から写実主義に移行する当時の殆んど全ての作家が、ゲーテの死と共に失われた過去の「芸術時代」と未だ見出されぬ新しきものとの間に不安な動揺を続けていた時、孤り在来の文学的伝統には比較的煩わされなかつた稀有な存在である。彼には、以て師とするに足る過去の詩人はシェイクスピア以外に見出せなかつた。彼が、わずか五週間の忽卒の間に、しかも革命的パンフレット『ヘッセンの急使』曝われて絶えず官憲の監視の目の下にあり、もはやまたあのシュトラスブルクへ逃亡する以外に方法がない、しかもそれには旅費の工面がつかないといつた焦燥と不安の最中に書きあげた『ダントンの死』の原稿と共にフランクフルトのグツコウ宛てに送つた一八三五年二月二日附の手紙では「小生には歴史を前にして赤面する理由が充分あります。しかしシェイクスピアを除いては凡ゆる詩人は歴史と自然の前では小学生のようなものだと考えてわずかに自ら慰めるばかりです」とあるように、彼のエスキュロス、ホーマーからジャン・バウル、ロマン派詩人達、果てはカルデロンにまで至る広汎な読書領域の中で、このハムレットの作者だけがビュヒナーの特別な尊敬を勝ち得ていたようである。影響もまた勿論少くなく、Victorなどの指摘する如く例えばビュヒナーのダントンはその性格、行動、世界観、言葉遣いに於てハムレットに接近しており、このハムレットはまたミュツセの *enfant du siècle* と共に『レオンツェとレーナ』の王子レオンツェの姿を藉りて現われる。マクベスヤリチャード三世の陰惨な世界もおそらくダントンの劇に無縁ではあるまい。とにかく劇詩人ビュヒナー

一にとつて、「えたいの知れぬ強い力の糸によつて操られている人形」のような個人の状況と歴史の宿命的必然を最もよく示してくれたこの英国の大先達は殆んど絶対的なものであつた。自国の詩人ではおそらくやはりゲーテが彼にとつて最大の詩人であつた。シラーは母親の趣味も手伝つてギムナージウム時代は尊敬を以てよく読まれたようではあるが、その作品のレトリックの面には少からぬ異論があつたらしい。ビウヒナー自身この両詩人についてははつきりと、前者には大いに尊敬の氣持を抱くが、後者はあまりいただけないといつてゐる。何故シラーがいただけないのか？ここにリズムの問題が出てくるわけである。ビウヒナーからみれば、理想詩人 (Idealischer) とよばれる詩人達はいわば「空色の鼻ととんだバトス」を具えた操り人形ばかりを描いて、血肉を具えた生身の人間、その悲喜哀歎が読者を感じさせ、その一挙一動が嫌悪を或いは讃嘆を喚ぶような人間を且つて描写したことがなかつた。」シラーの作品に現われる人間は現実から遊離して理想化されたこけ嚇しの人形に過ぎない。そしてこの理想主義が、*S Sturm und Drang* の詩人にして、ビウナーの未完の小説『レンツ』の主人公の口を通していわれる時には「人間性に対する最も卑劣な侮辱」であるとまで極論される。神様は、と更にレンツは続けている、この世界をお創りになつた時、おそらくそれが在るべきようにお創りになつたのだ。だから僕たち人間にはこれ以上のものをでつちあげることは多分できない筈です。僕たちにできることはせいぜい神様をちよつと真似てみる位のことすぎません。僕はすべてのものに——生命を、存在の可能性を要求します、そしてそれだけでよいのです。僕たちはそれだけでも、それが美しいか、醜いかなどと問ふ必要はないのです……

このレンツの現実の被造物に対する無条件の信条はそのまま亦一八三五年七月当時のビウヒナー自身の美学でもあつた。同月二八日附両親宛ての手紙はいわば、自作の『ダントンの死』についてのアポロジであり解説である。すでに解説である以上さらに屋を架する要はないであらう。曰く、

……劇作家というものは僕に言わせれば、歴史の書記 (Geschichtschreiber) 以外の者ではありません、ただそれ以上に出るのは、彼 (劇作家) が歴史を再現してくれる、いわば僕たちを直接、乾からびた物語を与える代りに、ある時代の生活の中へ移し置いてくれる、僕たちに性格描写の代りに性格そのものを、單なる記述でなくて形姿そのものを与えてくれるという点によるのです。彼の最高の使命は歴史に、それが事実起つた通りの歴史に能うかぎり近づくということです。彼の本は歴史そのものにくらべてより道德的でも、より不道德であつてもいけません。ところでこの歴史はお若いお女中方の読書の為にと神様が時にお造りになつたというような代物ではありません。だから僕の劇も御婦人向きでないからといつて、僕を悪くいうことはありません。僕には例えばダントンをはじめ革命の漂盗どもを道德的英雄に仕立てあげることなどできません……二三おだやかならぬ表現が出て来ても、當時世間周知の卑穢な言葉を想い出していただければわかる筈です、僕が彼等の口から言させたものなどはそのほんの影の淡い摘要みたいなものにすぎません。僕を非難するんならばむしろ、かかる題材を選んだという事に向けるべきものです。しかしこの異論はすでに反駁されて了つています。こんな異論を通用させるとなれば、これまでの文学の大概の傑作はみな非難されねばならないでしょう。詩人は道学先生ではないのです……

ビュウヒナーの『ダントンの死』はその材料を、先にもいつたようにシュトラールハイムの『現代』と、Mignet 及び Thiers の『フランス革命史』に負うている。戯曲とこれら原本との間の比較対照は最近の R. Thieberger に綿密な考証があるのでここで詳説するまでもない。事實はもとより、革命の表面に現れる人物の演説や会話も大體上記の、特に後者の両革命史が踏襲されている。「歴史の書記」ビュウヒナーはダントンに或はロベスピエールに史実以上の粉飾を加へようという考えはなかつた。若干の、いや多くの例外、創作は勿論ある。「性格描写の代りに性格

そのものを、記述でなくて形姿そのものを与える」ためには、また他面へツベルのいわゆる「歴史は作家にとつて自己の見解や思想を具体化するための手段である」ためには、そして亦作者自身の革命家としての直前の体験が基礎に横わつてゐる以上は、作者の感情移入の見られるのは当然である。だがその感情移入はいかに行われたか、いかなる感情が移入されたか、それこそが問題であらう。H. Mayer の言葉をかりるなら、作者の主観的体験を文学作品という客観的形式に移行させることの秘密、古くして新しい「体験と文学」の問題、具体的にいえば、歴史上のダントンとビュヒナーのダントン像との相違、更にはフランス革命の客観的歴史の様相とビュヒナーがこの革命を受けとり指示したところの仕方との間の相違こそ、ダントン劇の最も本質的な問題性に導き、作品とその作者、文学と体験との深い秘密の結び目を最もよく曝け出してくれるであらう——しかしそれに導く道程のいかに拘らず、ダントン劇におけるビュヒナーの本質的な問題性は一見明かである。ここで論は再び前述の宿命論と民衆の物質的動機の問題に還ることになる。革命の本来の目的は何か？ 民衆の物質的状況を革めることに在るのは自明である。而かも革命を動かす真の力は外ならぬこの民衆である。所でこの民衆はビュヒナーにあつては、「物質的に惨め」であると同時に、その持つてゐる「根性がかなり卑し」く、鼻の先に「錢の袋」でも見せつけぬ限りなかなか動こうとしない。一方革命は、彼等の腹が充ち足りて了えば、「卒中を起し」て、挫折の外ないというわけである。かかる革命の悪循環を「認識するだけがせいぜいで、支配することなど到底不可能であつたダントン内至ビュヒナーにとつて、この革命のメカニズムは打ち克ちがたい宿命と思われた。ビュヒナーのダントンはこの宿命に殉じた、テルミドールの日を予想しながら。だがダントンを離れたビュヒナー自身、歴史に対するオプチミズムと、自然の目的論的解釈に安住できなかつたビュヒナーも、ペシステイックな宿命論と決定論の上に居直つて了うほど老成してはいなかつた。若い革命家の情熱は社会構造に対する更に深い認識へ導く。社会を思想の媒介で、いわゆる教養ある富裕な階級

の側から改革することは不可能です、とグツコウ宛の手紙は断言している、新しい精神生活の形成は多数者の民衆の中に求められねばならない。少数の、いわゆる教養ある階級に代表される老いぼれた近代社会などは悪魔にでも捌かれるがよい——。このしかし課題の解決には未だ導くことのない憎悪の気持は次の社会劇『ヴォイツェク』へ通じて

（一九五六・一・一五）